

平間洋一著

# イズムからみた日本の戦争

——モンロー主義・共産主義・アジア主義——

錦  
正  
社



# 目次

はじめに	3
第一節 本書の視点と狙い	3
一 イズム（思想）と人種差別の視点から	3
二 長期的視点と軍事的視点から	9
三 地政学と経済史的視点から	12
四 謀略史観の視点から	15
五 敗者の視点から	17
第二節 本書の概要の説明	19
註	25
第一章 アジア主義の誕生と発展	27

第一節 欧米列強に殲滅された有色人種	27
一 絶滅させられた原住民の悲劇と西欧列強の人種観	27
二 「清掃」されたアメリカのインディアン	30
三 欧米列強のアジア侵略の歴史	32
第二節 アジア主義の誕生と日中朝同盟論	36
第三節 フィリピン人の対日期待とアメリカの猜疑心	40
一 第一次蜂起と軍艦「金剛」の寄港	40
二 第二次蜂起と日本の対応	42
(一) 日本政府の対応	42
(二) アジア主義者たちの対応	44
註	47
第二章 日露戦争の衝撃	50
第一節 敗戦国ロシアの衝撃	50
一 旅順陥落と血の日曜日事件	50
二 ロシア革命を推進した明石工作	52

iii		
第三章	アメリカのネーバリズム	87
	註	83
	第二節 第一次世界大戦とロシア革命	55
	第三節 中華民国の建国と日本	59
	一 日露戦争と中国の留学生	59
	二 中華民国の建国とアジア主義者たち	61
	第四節 日露戦争がベトナムに与えた衝撃	64
	一 東遊運動と東京義塾	64
	二 ベトナム留学生の追放	67
	第五節 日露戦争がインドに与えた衝撃	70
	第六節 日露戦争の中東諸国に与えた衝撃	73
	第七節 アジア主義と黄人の義務	77
	第八節 例外とされた大韓帝国	79

第一節 「神の摂理」のモンロー海軍主義の一世紀……………	87
一 モンロー主義とアメリカ海軍……………	87
二 モンロー海軍主義の拡大と西進……………	90
第二節 日露戦争と日米関係……………	93
第三節 日英同盟の解消と黄禍論者・人種差別論者マハン……………	96
第四節 日露戦争以後に生じた日米比関係……………	99
第五節 モンロー主義と極東共和国……………	101
第六節 ドイツの日米英豪分断攻勢……………	105
註……………	110
第四章 第一次世界大戦とアジア主義……………	115
第一節 第一次世界大戦とアジア主義の高揚……………	115
第二節 パリ講和会議と白色人種連盟……………	117

第三節 第一次世界大戦と日中関係……………120

    一 日米の対立激化と日中共同防衛思想の萌芽……………120

    二 総力戦認識と中国資源への着目……………125

第四節 フィリピンのアジア主義……………126

第五節 第一次世界大戦とアジア主義の拡大……………128

註……………132

第五章 日中のイヅムをめぐる戦い……………136

    第一節 中国共産党の誕生とコミンテルン……………136

    第二節 コミンテルンと中国の動乱……………139

    第三節 蔣介石と毛沢東の戦い……………142

    第四節 満州事変当時の中国の状況……………145

    第五節 満州事変後の満州の状況……………148

満州事変と列国の反応	150
第六節 国共内戦とソ連	154
第七節 列国を利用する超長期戦略「日本切腹、中国介錯」論	158
第八節 コミンテルンに利用されたアジアの共産党	160
第九節 コミンテルンに襲われた日本	163
一 軍隊への共産主義と国家社会主義の影響	163
二 右翼と左翼の思想の交差混合	166
第一〇節 ワシントン会議——押さえ込まれた日本	169
註	174
第六章 立ち向かう日本のイズム	180
第一節 当時の中国の実相	180
一 フランス駐日大使クロードルの見た中国	180
二 リットン報告書に見る当時の中国	182
三 マクマレー元駐華アメリカ公使の見た中国	185



第二節 共産主義・ファシズムへの対抗——「国体の本義」——	187
第三節 防共回廊——中ソ分断回廊の建設——	191
一 アジア主義の変質と反撃	191
二 アジア主義のイスラーム圏への進出	195
第四節 「持たざる国」の大アジア主義	199
一 革新外交官の暗躍	199
二 米内内閣の崩壊と陸海外の革新派	202
三 陸軍の統制派と皇道派と大アジア主義者	205
第五節 渦巻く列国の国益追求と日本	209
第六節 反コミンテルンからの日独接近	214
一 日独防共協定の締結	214
二 日独防共協定から三国同盟へ	216
第七節 日ソ中立条約の締結と日独ソ中米関係	219
第八節 「西へ西へ」のモンロー海軍主義	222

第七章	コミンテルンから見た「先の大戦」	231
第一節	独ソ開戦と尾崎秀実	231
一	尾崎秀実の活動と近衛文麿・陸軍中央	231
二	尾崎情報とゾルゲの功績	235
第二節	アメリカを対日戦争に導いた英ソ中の策動	238
一	F・ルーズベルト政権内のピンコ	238
二	蒋介石政権と中国共産党の反日組織	241
第三節	「日米諒解案」と英米ソ中の謀略	245
一	日米交渉の開始とイギリスとユダヤコネクション	245
二	「日米諒解案」を反故にしたドイツのソ連侵攻	249
三	「仕掛けられた戦争」に自爆した日本	252
第四節	「身元不明人」外交の再考	256
第五節	イズムが消したアメリカの日独対米和平交渉	258

第六節 「近衛上奏文」で救われた日本	262
第七節 日本の理想を実現したコミンテルン	267
一 ソ連の人種平等戦争への参戦	267
二 血塗られた共産主義の負債	269
註	272
第八章 大東亜戦争と日本の民族独立運動支援	279
第一節 インドの独立と日本の関与	279
一 インド国民軍とチャンドラ・ボース	279
二 ボースの進撃——チャロ・デリー（往け、デリーへ）——	284
三 独立を加速したインド国民軍の裁判	286
第二節 ビルマの独立と日本の関与	289
第三節 ベトナムの独立と日本の関与	293
一 日露戦争とベトナムの独立運動——王子まで日本へ亡命——	293
二 ベトナム戦争と残留日本兵	296

第四節	インドネシアの独立と日本	299
一	インドネシアの独立と日本の寄与	299
二	インドネシアの教科書が教える日本の戦争	302
第五節	フィリピンの親日独立派の対米戦争	305
一	日本占領中のフィリピンの親日派	305
二	アメリカ軍に銃を向けたフィリピン人	307
三	マルコス政権打倒デモと親日組織マカピリ	310
第六節	「八紘一宇」とユダヤ難民救済	312
第七節	「先の戦争」が民族国家の独立に与えた影響	314
一	日本軍の快進撃が民族独立運動に与えた影響の分析	314
二	日本軍の教育と民族国家の独立	317
三	日本軍の教育とその成果	318
四	南方特別留學生の連携活躍——ASEANの創設——	320
五	「したたか」なアジアの民族独立主義者	322
第八節	最も「したたか」な毛沢東	323

一	中華人民共和国の建国とアメリカ	323
二	ワシントンのチャイナロビー	326
三	中国本土におけるピンコの暗躍	329
	註	332
	第九章 アジア主義から見た日本の戦争	339
	第一節 アジア主義の敗北	339
一	あたたかいアジア主義——家族主義	339
二	戦勝国に裁かれたアジア主義	342
三	アジア主義の不戦敗——病院に隔離された大川周明	344
四	もしも大川周明が法廷に立っていたら	349
五	石原莞爾を避けた東京裁判	351
	第二節 人種的偏見との戦い	354
一	陰惨な日本人抹殺	354
二	イロコア族とされた日本民族	358
	第三節 日本の戦争の再考	361

一	戦争が開いた人種平等への扉	361
二	戦争が達成した民族国家の独立	365
三	第二次世界大戦の勝者と敗者は	368
四	日本の戦った一世紀の戦争再考	374
第四節	日本の戦後史再考	376
一	ピンコに殺された近衛文麿	376
二	日本の共産化を防いだ朝鮮戦争	379
三	陸軍統制派・革新外交官・革新官僚の戦後	382
註		387
第一〇章	一世紀の日本の戦争を考える	393
第一節	地政学から見た日本の安全保障	393
一	大陸国家と海洋国家との政治・経済・軍事体制の比較	393
二	大陸国家と海洋国家の盛衰の比較	399
第二節	歴史的に見た多国間安全保障体制の可能性と限界	404

第三節	同盟の本質は国益と軍事力	407
第四節	新しい日本への一石	414
一	歴史カードで沈む日本	414
二	歴史が教えるプロパガンダの真実	417
三	偽造文書が日本を破滅させた	421
四	国立戦争犯罪研究所の設立を	423
(一)	閉ざされた言語空間からの脱出	423
(二)	学術的東京裁判シンポジウムの開催を	425
註		430
おわりに		435
第一節	時代が変われば思想も変わる——マルクスホイの告白——	435
第二節	筆者の史観——一〇〇年単位で地球儀的視点で——	438
第三節	筆者の史観——情報工作（謀略）史観の重視——	440
第四節	筆者の史観——軍人（自衛官）の視点——	442

事項索引	478
人名索引	490
索引	490
あとがき	445
註	444